

# 経済情勢

## 概観

### 海外

#### ◇ケネディ政府の内外経済政策

ケネディ米大統領は1月20日の大統領就任演説および1月30日の一般教書において、米国の直面する内外の政治、経済諸問題のきびしさを大胆率直に指摘し、米国民に対しては「誇りと忍耐」をもって「高度の力と犠牲」を捧げることを、また、世界諸国民に対しては「全人類の誇り多い生活を保障する」という「歴史的偉業に参加」することを訴え、全世界に感動的な反響を巻き起こした。

その後2月上旬次々に経済教書、国際収支教書を発表して、新政府の具体的政策を明らかにしたが、その内容は一般教書に示されたきびしい現状認識に比すればかなり穏やかなもので、新政府の慎重な態度は一般に好感をもって迎えられている。なかんずく、昨秋以来のドル不安が、民主党政府の金政策ならびに財政政策に対する懸念といった心理的要因に基づくところが少なくなっただけに、ケネディ大統領による金価格堅持の強い決意の表明とオーソドックスな国際収支改善策の提案は直ちに金相場ならびに金流出に影響を与え、当面のドル不安の沈静に多大の成果をあげた。

米国景気は在庫調整を中心に引き続き全般的に下降し、1月の鉱工業生産指数は102とさらに1ポイントの低下を示したが、これまでの推移を1953～54年および1957～58年のそれに比すれば、今回の景気後退の規模およびテンポはかなり穏やかなものとなりそうである。もっともケネディ大統領は1月の失業者数が539万人（失業率6.6%）というかなりの高水準に達したことを重視し、議会に対し失業保険の給付期間の延長など数項目の

失業対策を要請するとともに、一時的減税の可否については75日後に景気の動向を再検討したうえで決めることとした。

西欧においても過去2年間のブームがほぼ成熟段階に達し、鉱工業生産の低下ないし伸び率鈍化がみられる。とくに英国においては貿易収支の赤字と国内景気の停滞という内外両面の不均衡が表面化しつつあり、英蘭銀行が直接輸出信用のリファイナンスにのり出すなど輸出促進に積極的態度を示している。一方、恒常的な貿易収支の黒字問題をかかえた西ドイツではさらに公定歩合および支払準備率の引下げを行なって短期資本の流出を促進する一方、米国、西ドイツ双方の国際収支問題の解決については西ドイツの共同防衛ならびに後進国援助の分担に対する協力の線で基本的解決が図られようとしている。

これらの動きは、いずれも昨秋来のドル不安の発生を契機として世界の主要国において、国際間の均衡維持の重要性に対する認識が一段と高まってきたことを示すものであり、今後OECDを中心とする国際協力がいっそう積極的に進められることになる。

### 国内

#### ◇景況の大勢落ち着きの中にも輸出に問題

最近の商品市況をみると、木材の堅調に加えて繊維の反発、紙、セメントの持直しなど、やや小縮まり模様もみられるが、しかし大勢は金属類の軟化を中心に依然弱含みである。繊維については、下げすぎの反動もあって一時急反発商状がみられたが、2月にはいってからは上げしぶっている。先行き輸出の伸び悩み懸念もあり上伸力は乏

しいとみられる。この間、非鉄は輸入ものの出回り増加、海外市況の軟化を反映して一段と軟化模様を深めており、鉄鋼、石油、有機化学製品なども、需要は引き続き強いが生産がそれを上回ってふえているため、軟落歩調をたどっている。

鉱工業生産（季節調整済み以下同じ）は前月急増（+3.9%）のあと、12月には-0.7%と前月比減少をみた。このところ、月によってデコボコが目立っているが、これは一つには季節指数にも問題があるほか、機械が前月大型資本財機器の完工をみたため大幅に反動減となったことが大きく響いている。しかし最近の生産動向をならしてみると、引き続き基調は強いが、ひところのような勢いのついた上昇はみられなくなっている。

鉱工業出荷も、生産とはほぼ同様の事情で前月比-2.4%と大幅に減ったため、生産者の製品在庫はかなりの増加となった。在庫の動きにも、このところかなり波がみられるが、大勢としては漸増傾向を続けている。もとより自動車、農機具など需要の増大を見込んだ強気の在庫が中心であるが、鉄鋼、石油、化学、窯業などの一部では、設備能力の増大を背景としてやや増産圧力が強まっており、それが在庫漸増をもたらすと同時に、市況弱含みの背景となっている。

暮れから年明け後にかけて、小売市況の活況にもうかがわれるように、農村、都市を通じて個人消費が相当ふえているようである。しかし、まだ生産の増勢に一段と拍車をかけるほどのものとはみられない。当面やはり設備投資が景気をささえる中心と思われる。もっとも、資本財機械関係指標の動きについてみると、生産、出荷の伸び率はやや鈍ってきた気配もある。しかし、土地造成その他、設備関連の建設工事受注は増勢が強まっており、先行き注目を要する。

一方国際収支動向をみると、1月は経常収支戻が大幅赤字（99百万ドル、前年同月29百万ドルの

赤字）となった。これは輸入が季節的關係を中心に12月並みの高水準を持続した反面、輸出が年末積み急ぎの反動もあって大幅に落ち込んだことや、特需が季節的關係によって減少したことなども響いている。しかし、最近の動きをみると、輸出は成約面、信用状態でとみに伸び悩みの様相を深めている。なかんずく対米輸出の不振が意外に著しく、前年水準を大きく下回っていることは注目を要する。

#### ◇企業の手元やや引きゆるみ気味

1月の銀行券は、平均発行高でみると前年同月を20%上回っており、暮れ以来ややツリ高気味である。所得、消費の増大や中小企業筋の現金取引拡大などを映じた動きであろう。しかし、前年比伸び率が急に高まったように見えるのは、たぶん前年同期の伸び悩みが影響しており、銀行券の基調がとくに強まっているわけではない。

全国銀行貸出も1月は447億円の大幅増加となった。これは含み貸しの一部吐き出しが行なわれたことや、銀行の貸出態度が若干ゆるんでいることなども影響しており、投資活動に結びついた資金需要の実勢は従来とさして変わらない。貸出増加の中心は、引き続き設備貸出、大メーカー運転資金などであるが、商社貸出の増勢もやや強まっている。総合商社では系列企業への投融資が最近再びふえているようである。

こうした高水準の貸出が続く一方、最近起債や増資が大幅に進み、企業の流動性回復がやや目立っている。企業の保有通貨がふえているだけでなく、取引の決済が比較的早めに行なわれる面もみられるようである。

以上のとおり最近の景況は強い中にも、大勢としてはやはり落ち着きを失っていないが、国際収支や設備投資の先行きにやや問題がきざしていることも見落してはならない。